

グラフィモールイ(ルーマニア)



素材研究 (海外)



広大な敷地の中に建てられたスチェビツァ修道院



街角で語らう地元のお婆さんたち



現在も日常的に利用されている馬車



ヴォロネツィ修道院の壁面にびっしりと描かれたフレスコ画

修道院の光景に溶け込む羊や子どもたち

フレスコ画が描き出すルーマニアの歴史 世界遺産に登録された修道院群の観光拠点

ルーマニア北部でウクライナと国境を接するブコヴィナ地方にあるグラフィモールイは、「モルダヴィアの教会群」として世界文化遺産に登録されている複数の修道院を訪れる際の観光拠点となる町です。四方を山に囲まれ、モルドバ川が流れる美しい自然景観の中で、昔ながらの純朴な生活が営まれ、「ヨーロッパの美しい村30選」の中でもユニークな存在として注目されています。

伝統文化を今に伝える存在

中世の時代にルーマニアの国土が周辺民族に侵略されるたびに、町や集落も焼き尽くされてきた中で、ルーマニアの伝統的な文化を残すことができたのは、要塞のように造られた修道院の存在があったからだとも言われています。ルーマニアの修道院は、日本各地に存在する神社のような位置づけで、宗教的な修行を行う修道士が暮らす場所であると同時に、地域社会の中核として生活や文化を支える役割を担ってきました。

その中にあつても、グラフィモールイのあるブコヴィナ地方の修道院は、著名な領主が建立したもので、ルーマニアの国史を伝える場所となっています。

14世紀から17世紀にかけて、現在のルーマニア北部と旧ソ連のモルドバ共和国を

含む地域にはモルドバ公国が栄えていましたが、その最盛期ともいえるべき15世紀には、ヨーロッパに侵略したオスマン・トルコ帝国との間で紛争が頻発し、モルドバ公国を治めていたシユテファン大公はトルコ軍に立ち向かい、勝利を収めるたびに神の加護に感謝して修道院を建立したと伝えられています。

昔ながらの暮らしも魅力に

ブコヴィナ地方の修道院群が世界遺産として最初に登録されたのは、1993年のことでした。

これらの修道院群を特徴づけているのが、内壁だけにとどまらず、外壁にも残されているフレスコ画です。文字が読めない農民らのために描かれたと言われる聖書の内容やオスマン・トルコ帝国との戦いもモチーフとなっているフレスコ画は、モルドバ公国が厳しい状況に直面していた時代に、人々の精神的な支えにもなつたとされています。

当時と同じように繰り返されている人々の暮らしぶりも、ブコヴィナ地方の独特の雰囲気を出しており、昔ながらの鎌で草刈りをしたり、鋤で畑を耕す様子などは、まるでタイムスリップしてしまったかのような錯覚を感じさせるものです。

グラフィモールイでは、日曜日になると民族衣装で着飾って家族と教会のミサに出かける人々の様子を見ることもでき、古き良き伝統を今に伝える生活スタイルは、この町の大きな魅力となっています。